

# 古ジャワ金言集 Sārasamuccaya 訳注研究 (1)

安 藤 充

キーワード：古ジャワ語 金言集、マハーパーラタ、Sārasamuccaya

## はじめに

Sārasamuccaya は古ジャワ語による金言・箴言を集めた文献の中で質的にも量的にも比類ない作品である。1849年に R. Friedrich が「バリの法典類の一つ」として初めてこの文献の存在を世に紹介し、1901年には H.H. Juynboll が本テキストに引用されるサンスクリット偈の多くがサンスクリット叙事詩『マハーパーラタ』中に含まれることを指摘している<sup>1</sup>。

校訂本は1962年に Raghu Vira が Śata-Piṭaka のシリーズで出版した。彼の序文によれば本作は「バリ・ヒンドゥー教徒にとってのギター」、つまり、インドのヒンドゥー教徒にとってのバガヴァッド・ギターに匹敵する、マハーパーラタに範をとったヒンドゥーの倫理観を示した文献ということである<sup>2</sup>。

この作品は、古ジャワ文献によく見られるように、サンスクリット偈とそれに対する古ジャワ語解説（翻訳、または語釈を含む説明）からなる。タイトルの意味合いについては、テキストの冒頭、第1から第6のサンスクリット偈とそれぞれの古ジャワ語解説からわかるとおり、「マハーパーラタの精髓 (sāra) の集大成 (samuccaya)」という作品の内容を端的に表現したものである。つまり、ビヤーサ師の著作（編纂）によるマハーパーラタから、ワラルチ (Vararuci, Wararuci) 師が至高の (wiśeṣa) 精髓 (sāra) を集めたもの (samuccaya) ということである<sup>3</sup>。

編（著）者とされるワラルチについては、未だ歴史上の人物比定がされていない。L. Sternbach は、サンスクリットの金言集の中に同名の作者による小品があることを指摘し、その作者が本作を編んだ可能性を示唆する一方、ジャワないしバリで製作されたという Raghu Vira の推測については否定的である。それは作品中のサンスクリット偈が古ジャワ版マハーパーラタ中の偈よりもインド原典のサンスクリット偈により近いことに基いている<sup>4</sup>。なお、成立年代についても不明であり、Sternbach が「おそらく14世紀」<sup>5</sup>と特に根拠も提示せずに述べているのが、これまでの研究における唯一の言及で

ある。

今回、本テキストを読解し、訳注研究を試みるのは、第一に、Raghu Vira の出版以来、英訳すら公刊されていないことによる。確かに Raghu Vira の刊本ではサンスクリット偈517のそれぞれに英語が添えられているのだが、本人が序文で明かしているように、これらは“a free English translation”<sup>6</sup>の域を出ないものである。さらに、各偈に対する古ジャワ語解説は、内容的にイントロダクションにあたる冒頭6偈以外は、free translationすら付けられていない。

古ジャワ文献研究のおもしろさの一つは、サンスクリット偈と古ジャワ語解説とを丁寧に読み比べ、原典の理解の深さ、あるいは現地的な意味の変容などをそこから読み取るところにある。これまで筆者が取り組んできた古ジャワの宗教文献や金言集<sup>7</sup>などと比べて、本テキストの古ジャワ語解説部分は短く直截的なものが多く、古ジャワ語解説の妙味にいささか欠ける印象はあるが、それでも、古ジャワ語箇所を正確に読みとりサンスクリット偈の言い回しや語彙と比べることによって、古ジャワ的な受容の特徴を読み取ることができるだろう。

当研究のもう一つの目的は、テキストをローマ字アルファベットで提示することである。Raghu Vira の刊本は、バリ文字とデーヴァナーガリーの2つで校訂テキストを示している。序文によれば、この刊本は Raghu Vira と Ch. Hooykaas の共同研究の成果であり、前者がサンスクリットを、後者が写本校合や古ジャワ語解釈などを行なっている<sup>8</sup>。それぞれの専門家の手による質の高い研究で、半世紀以上経た現在でも、その価値は失われていない。特に、サンスクリット偈についてはプーナ校訂本の異読を参照したうえでコメントが詳細であり、どのような系統の版が古ジャワの Sārasamuccaya の元になっているかを解き明かす手がかりになる。他方、残念ながら、古ジャワ解説部分は非常に読みづらい。というのも、古ジャワ語の語彙に対して、相応するサンスクリット語、または文法的説明（基語と接辞の分解表示）がデーヴァナーガリー転写テキスト中に随所に挿入されているからである。古ジャワ語の文章をデーヴァナーガリーで表記するというのは、インドのサンスクリット研究者を主対象にしている Śāta-Piṭaka のシリーズでは当然かもしれないし、英訳のない古ジャワ解説部分に対して、往時の碩学が、的確な解釈の跡を残してくれているのはありがたい。しかしやはり、テキスト本文はよどみなく読めるように表示すべきであるし、インド古典以外の研究者向けには、ローマ字転写のテキストを提示することで、本作品へのアクセスを容易にし、研究関心を喚起することができると思う。

もう一点加えるとすれば、Raghu Vira 以降の研究成果を多少補足することである。古ジャワ語テキストについて、本研究では写本に遡って読みを改めることまではしないが、1982年刊行の古ジャワ語・英語辞典に引用される Sārasamuccaya からの例文をできるだけ参照し、現在の標準的な古ジャワ語文献のローマ字表記や分かち書きに合わせるよう

に注記を加える。これは、他の古ジャワ語文献を研究する方々とテキスト情報を共有しやすくするための便宜としてのものである。

サンスクリット偈の典拠については、*Raghu Vira* の刊本での詳細な検討に加えて、*Sternbach* が網羅的なサンスクリット金言研究の一環で *Sārasamuccaya* も取り上げ、517 偈のうち 360 についてマハーバーラタに相応偈があることや、ほかにもマヌ法典などに一致がみられることを報告している<sup>10</sup>。典拠の調査はすでにやり尽くされた感もあり、新たな対応関係を見つけることは難しいだろう。ただ、本テキストの一部の偈は、マハーバーラタの特定の系統の異読と一致することもわかっており、こうした異読に着目して注記を加えていくことで、テキスト成立のプロセスを解明する何かしらの糸口を見出すことを期するものである。

## ローマ字テキスト・訳

### 0.

*Oṃ Awighnam astu*

(本著作に) 障碍なきことを。

*Bhagawān Wararuci mupulakēn sāra-sāra sañ hyañ aṣṭādaśaparwa<sup>11</sup> / gawe Bhagawān Wyāsa / matañnya n panamaskāra sira i Bhagawān Wyāsa / liñ nira //*

ワラルチ師がウィヤーサ師の作品である偉大な十八巻の精髓をまとめられた。それで、(ワラルチ師は) ウィヤーサ師に敬意を表し、こう述べられた。

### 1.

*jajñe bahujñam paramābhyudāraṃ yaṃ dvīpamadhye sutam ātmabhāvāt / parāśarāt satyavatī maharṣiṃ tasmai namo ‘jñānatamonudāya //*<sup>12</sup>

サティヤヴァティー妃が御身をかけて、パラージャラ公との間に、博識で極めて気高き聖者であるご子息を大洲の中心地でお生みになられた。その無明の闇を破るお方に頂礼します。

*hana sira maharṣi / tan hana kapiñgiñ nira / kinatwañan iñ triloka / rumantasakēn ptēñ niñ ajñāna niñ sarwabhāwa / anak sañ satyavatī / patēmwan lawan Bhagawān Parāśara / prasūta ri tñah nikañ Kṛṣṇadwīpa / Bhagawān Wyāsa naran ira / sira ta sēmbahēn / kamna ni<sup>13</sup> ñhulun mujarakna sāra niñ gawe nira aji //*

聖者がおられた。その方は知らないことがなく、三界で畏敬された。生きとし生けるも

のの無知の闇を破るお方<sup>14</sup>であった。サティヤワティー妃がパラージャラ公との結婚で授かったご子息で、クリシュナの島<sup>15</sup>の真ん中でお生まれになった。名前をウィヤーサ様とおっしゃる。まずはこの方に頂礼すべきであろう。私めがその御作の精髓を語らせていただく前に。

## 2.

yathā samudro 'timahān yathā ca himavān giriḥ /  
ubhau ratnanidhī khyātau tathā bhāratam ucyate //<sup>16</sup>

広大な海や雪山が、いずれも宝玉を蓄えると讃えられるように、バラタの物語もそうである。

nihan kottaman ira / kadyaṅga niñ tasik lawan gunuñ himawān / an kalyan mās maṅik sarwamūlya / maṅkana ta sakweh nikañ aji Bhāratatakathā ginawe nira / an tasakan<sup>17</sup> in uttamarasa makādi rahasyajñāna //

その（バラタの物語の）素晴らしさとはこうである。海や雪山が黄金や宝石などあらゆる宝の倉となっているように、バラタ族の物語の教えのすべてを伝えるものである。秘密の智慧など極上の味わいのある熟成した作品である。

## 3.

idaṃ kavivarair nityam ākhyānam upajīvyate /  
udayaprepsubhir bhṛtyair abhijāta iveśvaraḥ //<sup>18</sup>

この物語は詩聖らによって常に飯の種になっている。昇進を求める下僕らが、高貴な生まれの主人に頼っているように。

kunañ kottaman sañ hyañ Bhāratatakathā / ri denyan sira nitya pinakopajīwana sañ kawiwara /  
kadyaṅgan sañ prabhu sujanmān pinakopajīwana niñ wadwāñusir wibhawa //

バラタ族の物語が素晴らしいのは、常に優れた詩人らによって生きる糧とされているからである。富を求める家臣らが生まれのよい支配者を頼るように<sup>19</sup>。

## 4.

itihāsottamād asmāj jāyante kavibuddhayaḥ /  
pañcabhya iva bhūtebhyo lokasaṃvidhayas trayāḥ //<sup>20</sup>

この優れた古潭から詩人の魂が生まれる。五元素から三界の配置が（生まれる）ように。

apayāpan ikañ aji Bhāratatakathā / sañka niñ buddhi sañ kawi / kadyaṅga niñ triloka an wijil sañke

pañcamahābhūta //

なぜなら、このバラタ族の物語は、詩人の知性の源であるからである。三界が五大元素から生まれるように。

## 5.

anāśrityaitad ākyānaṃ kathā bhuvī na vidyate /

āhāram anupāśritya śarīrasyeva dhāraṇā //<sup>21</sup>

この物語に依拠しない物語はこの世に存在しない。食べ物を摂らずには身体の維持があり得ないように。

tātan hana aji riñ bhuwana / tan pakāśraya ikañ Byāsawacana / kadyaṅga niñ śarīra tan hana / ya tan pakāśraya ñ āhāra //

この世界にピヤーサ師のお話<sup>22</sup>に頼らない教えなどはない。食事に頼らない肉体がないのと同じである。

## 6.

śrutvā tv idam upākhyānaṃ śrāvyaṃ anyan na rocate /

pumskokilarutaṃ śrutvā rūkṣā dhvāmṣasya vāg iva //<sup>23</sup>

このお話を聞けば、他に聞くに値するものはない。雄カッコウのさえずりを聞いた後のカラスのしゃがれ声のように。

lawan waneh kottaman ira / yan hana sira juga sira tlas rumñö rasa niki sañ hyañ aji / pisaninū juga sira ahyun rumēñwa kathāntara / tka riñ gīta weṅu wīnādi / kadyaṅga niñ wwañ rumñö suśabda niñ kuwoñ / huwus rumsēp ri hati lañö niñ<sup>24</sup> swaranya / amañun harṣa niñ citta / tan hana gantā ni kahyun rumēñwa rēs niñ śabda niñ gagak //

(この物語の) さらに他のすぐれた点について (言えば)、この聖なる教えの要点を聞いた後には、決して他の物語を聞きたいとは思わない。歌や笛の音に至るまで<sup>25</sup>。たとえば、カッコウの美しい声を聞いた人は、その声の妙なる響きが心に沁みわたり、歡喜の心をいただく。(その後) カラスのいやな声を聞きたいなどとは決してあり得ない。

mañkana liñ Bhagawān Wararuci n panamaskāra riñ Bhagawān Byāsa / nēhēr umujarakēn kottaman / sāra naran iñ wiśeṣa / samuccya papupulnya / nahan matañnyan Sārasamuccaya naran ikañ sañ hyañ aji / damēl Bhagawā Wararuci / nihan pinkēt Bhagawān Waiśampāyana iñ Mahārāja Janamejaya / i kāla nira cumaritākēn ikañ Bhāratakathā / ya tiki witan iñ Sārasamuccaya //

このようにワラルチ師は語り、ピヤーサ師に深く礼を捧げた。その後、珠玉の作品を語られた。(表題の) *sāra* とは、際だったもの、*samuccaya* とは集成の意味である。したがって、この聖なる教えは、*Sārasamuccaya* と称される。これはワラルチ師の作である。ワイシャンパーヤナ師がバラタ族の物語を作られ、ジャナメージャヤ大王に語られた。それが *Sārasamuccaya* の源である<sup>26</sup>。

## 7.

*dharme cārthe ca kāme ca mokṣe ca bharaṭarṣabha /  
yad ihāsti tad anyatra yan nehāsti na tat kvacit //*<sup>27</sup>

正義であれ、財産であれ、欲望であれ、解脱であれ、バラタの雄牛よ、この世にあるものはあの世にもあり、この世にないものは他のどこにもない。

*anaku kamu ṅ Janamejaya / salwir niṅ warawarah / yāwat makapadārtha caturwarga /  
sāwatāranya*<sup>28</sup> / *sakopanyāsanya / hana juga ya ṅke / saṅkṣepanya / ikaṅ hana ṅke / ya ika hana  
iṅ lane saṅkeriki / ikaṅ tan hana ṅke / tan hana ika riṅ lane saṅkeriki //*

我が子ジャナメージャヤよ。あらゆる教えは、4つの類<sup>29</sup> (のいずれか) を内容とし、形式と解説を伴ってこの世に存在する。要するに、この世にあるものは、それが原因となってあの世にも存在する。この世にないものは、それゆえにあの世にも存在しない。

## 8.

*mānuṣaḥ sarvabhuteṣu vartate vai śubhāśubhe /  
aśubheṣu samāviṣṭaḥ śubheṣv evāvakārayet //*<sup>30</sup>

人間は生きとし生けるものに対し善悪いずれにも関わるものである。悪行にとりつかれても善行に向かうべきである<sup>31</sup>。

*ri sakweh niṅ sarwabhūta / ikiṅ janma wwaṅ juga wnaṅ gumawayakēn ikaṅ śubhāśubhakarma /  
kunēn pan ēntasakna*<sup>32</sup> *riṅ śubhakarma juga ikaṅ aśubhakarma / phala niṅ dadi wwaṅ //*

一切生類に対して、人間の一生は善行悪行を行う可能性がある。その善行のうちにある悪行を取り除かなければならない<sup>33</sup>。それが人間の(その後の)ありかたの結果となる(からである)。

## 9.

*upabhogaḥ parityaktaḥ nātmānam avasādayet /  
caṅḍālatve 'pi mānuṣyaḥ sarvathā tāta durlabham //*<sup>34</sup>

享樂を捨て去り、自らを貶めるようになってはならない。たとえチャンダラであって

も、人間というのは常に得難いものである、父よ。

matañnyan haywa juga wwañ manastāpa / an tan paribhawa / si dadi wwañ ta pwa kagōnkna ri  
ambëk / apayapan paramadurlabha ikiñ si janma mānuṣa<sup>35</sup> ñaranya / yadyapi cañḍālayoni tuwi //  
したがって、落胆してはいけない。蔑んでもいけない。人間のあり方は心持ちが重要で  
ある。なぜなら、人間に生まれるというのは極めて得難いものであるからである。たと  
えチャンダーラの母のもとに生まれるとしても。

## 10.

iyam hi yoniḥ prathamā yām prāpya jagatīpate /  
ātmānaṃ śakyate trātuṃ karmabhiḥ śubhalakṣaṇaiḥ //<sup>36</sup>

我が得たるこの母胎が最上である。世界の主よ。善なる特徴をもつ行により自らを救う  
ことができる。

apan ikiñ dadi wwañ / uttama juga ya / nimitta niñ mañkana / wnañ wi ya tumuluñ awaknya  
sañke sañsāra / makasādhana ñ śubhakarma / hiñan in kottaman in dadi wwañ ika //

人間という存在は最高である。それはこれまで述べた理由による。善行を手だてとして、  
人は輪廻<sup>37</sup>から我が身を救うことができる。これが人間存在の極致である。

## 11.

ihaiva narakavyādheś cikitsāṃ na karoti yaḥ /  
gatvā nirauśadhaṃ sthānaṃ sarujaḥ kiṃ kariṣyati //<sup>38</sup>

ここで地獄の病いを治さない者は、薬もなく苦痛に苦しみながら何をするというのか。

hana pwa wwañ tan gawayakēn ikañ śubhakarma / tamba niñ narakaloka kāñkēn lara / pjaḥ pwa  
ya / wwañ alara mara riñ deśa katunan tamba ta ñaran ika / rūpa niñ tan katmu ikañ enak  
kolahanya //

(人間界で) 善行をしない人がいるが、(実は) 苦痛そのものである地獄の世界を癒やす  
ものが善行である。(善行をせずに) 死んで、人は治療薬がない所で病に苦しむ、と言  
われる。これが善行で安楽を得ることのない人の様相である。

## 12.

sopānbhūtaṃ svargasya mānuṣyaṃ prāpya durlabham /  
tathātmānaṃ samādadyād dhvaṃseta na punar yathā //<sup>39</sup>

天界への階梯である、人間という得難い生を受けたからには、身を滅ぼさぬようにしつ

かりしなければならぬ。

paramārthanya / pēnpōhēn ta pwa katēmwan ikiñ si dadi wwan<sup>40</sup> / durlabha wi ya ta / sāksāt  
haṇḍa niñ mara riñ swarga ika / sanimitta niñ tan tibā muwah ta pwa damlakna //

真意はこうである。人間という存在を得たからには最大限に活用すべきである。まことに得難いからである。それはまさに天界へ赴く梯である。それゆえ、二度と（人間界から）墮落しないようにすべきである。

### 13.

karmabhūmir iyaṃ brahman phalabhūmir asau matā /

iha yat kurute karma tat paratropabhujyate //<sup>41</sup>

ブラフマンよ、こちらは行為の世界、あちらは結果の世界と考えられる。こちらで行為をなすと、その果があちらで享受される。

apan ikiñ janma mañke / pagawayan śubhāśubhakarma juga ya / ikañ ri pēna pabhuktyan<sup>42</sup>

karmaphala ika / kaliñanya / ikañ śubhāśhubhakarma mañke / ri pēna ika an kabhukti phalanya /  
ri ppat ni kabhuktyanya / mañjanma ta ya muwah / tumūta wāsanā niñ karmaphala / wāsanā  
ñaran iñ saṃskāra / turah niñ ambē mātra / ya tinūta niñ paribhāṣā / svargacyuta / narakacyuta /  
kunañ ikañ śubhāśubhakarma ri pēna / tan paphala ika / matañnyan mañke juga pēnpōna  
śubhāśubhakarma //

というのもこの世の生というのはこのようであるからである。（すなわち）善行であれ悪行であれ（この世で）行えば、あの世でその行為の結果を享受する。つまり、この世での善行悪行は来世においてその結果が享受される。その享受が尽きれば、行為の結果の潜在力<sup>43</sup>に従って、再び生を受ける。潜在力とは心象のことである。心にわずかに残る（イメージ）である。（転生は次のような）決まり文句につながる。「天界落伍」とか「地獄脱出」<sup>44</sup>とか。さて、あの世で善行悪行を行っても、それらは果実を生まない。したがって、この世でこそ善行悪行を心して行うべきである。

### 14.

mānuṣyaṃ durlabhaṃ prāpya vidyullasitacañcalam /

bhavaḥkṣaye matiḥ kāryā bhavopakaraṇeṣu //<sup>45</sup>

雷の閃光のごとき得難き人間（たる生）を得たからには、（自らの）存在とそれに伴うものが（ついには）滅びることに思いを致すべきである。

ikiñ tañ janma wwan / kṣaṇikaswabhāwa ta ya / tan pahi lawan kḷap niñ kilat / durlabha towi /

matañnyan pōñakna ya ri kagawayan niñ dharmasādhana / sakāraṇa niñ manāśana ṅ sañsāra /  
swargaphala kunaṅ //

この人間の生命は、ついには滅びることを自性としている。それは稲光と同じく実に得難い。それゆえ、本務を果たす<sup>46</sup>べく最善をつくすべきである。輪廻転生を滅し、天界という結果を獲得するためである。

## 15.

yo durlabhataraṃ prāpya mānuṣyaṃ lobhato naraḥ /  
dharmāvamantā kāmātmā bhavet sakalavañcitaḥ //<sup>47</sup>

より得難き人間（たる生）を得ても、貪欲ゆえに、人は愛欲を本性とし、本務を蔑ろにし、全財産を騙し取られることになる。

hana pwa tumēmu ṅ dadi wwaṅ / wimukha riñ dharmasādhana / jñek riñ arthakāma ārah /  
lobhāmbēknya / ya ika kabañcana ṅaranya //

人間としての生を得ても、本務の遂行にそっぽを向いて金と女<sup>48</sup>にうつつをぬかすとは、嘆かわしい。心が貪欲にまみれている者は誘惑に負けると言われる。

## 16.

mānuṣyaṃ mahāduṣprāpyaṃ taḍidvilasitopamam /  
tal labdhvā yadi saṃsārān nāpakrāmati vañcitaḥ //<sup>49</sup>

極めて得難い人間という存在は稲光に等しい。それを得ても、輪廻転生から抜け出さなければ、騙された者である。

ikaṅ maṅgih si dadi wwaṅ / prasiddha wnaṅ riñ dharmasādhana / tātan mēntas sañke sañsāra /  
kabañcana ta ṅaran ika //

人間としての生を獲得し、本務の遂行<sup>50</sup>も貫徹しても、輪廻転生から脱することがなければ、騙された者と言われる。

## 17.

ūrdhvaḥvāhur viraumy eṣa na ca kaścic chṛṇoti me /  
dharmād arthaś ca kāmaś ca sa kim arthaṃ na sevyate //<sup>51</sup>

腕を挙げて叫んでも、誰も私に耳を傾けない。財と愛は法から生じる。（然るに）なぜ人は（法に）誠を捧げないのか。

nihan mata kami mañke / manawai / mañuwuh / mapitatur / liñ mami / ikaṅ artha / kāma /

malamakēn dharma juga ñ ulaha / haywa palañpañ lawan dharma mañkana liñ mami / ndātan hana juga añññö ri heturnyan ewēh sañ makolah dharmasādhana / apa kunañ hetunya //

今ここで私が呼びかけ、叫び、こう話しかける。「財と愛は法に基いている。したがって、すべきことは（こうである。）法に背いてはならない。」このように私が説いても、聴く者は誰もいない。だから本務の遂行を貫徹することは難しい<sup>52</sup>。ではその理由は一体何か。

## 18.

kāmārthau lipsamānas tu dharmam evāditaś caret /

na hi dharmād apetyārthaḥ kāmo vāpi kadācana //<sup>53</sup>

財と愛とを得んとする者はまず法をこそ実践すべきである。

なぜなら、法から外れては、財も愛もいつになっても得られない。

yan paramārthanya / yan arhtakāma sādhyan / dharma juga lēkasakna rumuhun / niyata katēmwan iñ arthakāma mne / tan paramārtha wi katēmwan iñ arthakāma / de niñ anasar sañke dharma //

真意は何かと言えば、もし財と愛を希求するならば、法をこそまず実践せよ。たちまちに財と愛の獲得が確実となる。法の道から逸脱する者には財と愛の獲得は実現しない。

## 19.

dhārmikaṃ pūjayanti ca na dhanādhyam na kāminam /

dhane sukhakalā kācid dharme tu paramaṃ sukham //<sup>54</sup>

人々は高潔な人を敬うのであって、財や愛欲にまみれた人を敬うのではない。財宝にはいささかの幸があるとしても、法には究極の幸がある。

kunañ saṃ pañḍita / sañ dhārmika juga / inastuti nira / inalēm nira / an sira prasiddha anmu sukha / tan pañalēm sugih / kāmī / apan tan tuhu sukha / ri hana niñ ahañkārājñāna / ri sññ niñ dhanakāma wyawahāra //

賢者とは徳高き人である。（そのような人は）褒め称えられ、必ずや幸福を得る。（人々は）金持ちや欲におぼれる者を褒めることはない。なぜなら高慢な者、財や愛欲に忙殺される者には幸福はないからである<sup>55</sup>。

## 20.

dharmaṃ eva plavo nānya svargaṃ samabhivāñchatām /

sa ca naur vañijas taṭaṃ jaladheḥ pāram icchataḥ //<sup>56</sup>

天界を希求する者たちにとって法こそが船であり、それより他にはない。それはまた、

海の対岸に渡ろうとする商人にとっての船でもある。

ikañ dharma nāranya / hēnu<sup>57</sup> niñ mara riñ swarga ika / kadi gati niñ parahu / an hēnu<sup>58</sup> niñ  
bañyāga n ēntas iñ tasik<sup>59</sup> //

法というのは天界に通ずる道である。海を渡る商人にとっての船のようなものである。

## 21.

yatnaḥ kāmārthamokṣāṇāṃ kṛto 'pi hi vipadyate /  
dharmāya punar ārambhaḥ sañkalpo 'pi na niṣphalaḥ //<sup>60</sup>

愛欲や財や解脱のために努力をしてもしくじることがある。しかし法のために事を起こすことは、たとえ想いだけでも、結果を生まないことはない。

ikañ kayatnan ri kagawayan iñ<sup>61</sup> kāma / artha / mwañ mokṣa / dadi ika tan paphala / kunañ ikañ  
kayatnan riñ dharmasādhana / niyata maphala ika / yadyapin añēn-añēnan juga / maphala atika<sup>62</sup> //  
愛欲、財、解脱に関して何かをしようとする努力は、むなしい結果に終わる。一方、本務の遂行に努めることは、必ずや果実をもたらす。たとえ（そうしようと）考えるだけでも、たしかに成果があるものである。

## 22.

yathādityaḥ samudyan vai tamaḥ sarvaṃ vyapohati /  
evaṃ kalyāṇam ātiṣṭhan sarvapāpaṃ vyapohati //<sup>63</sup>

太陽が昇って、一切の闇を破るように、人は善なることを行って、一切の悪を滅する。

kadi krama sañ hyañ āditya / an vijil / humilañakēn ptēñ niñ rāt / mañkana tikañ wwañ mulahakēn  
iñ dharma / an hilañakēn salwir iñ pāpa //

太陽のふるまいになぞらえれば、日が昇って世の闇を破るように、人間は本務<sup>64</sup>をつくしてすべての悪を滅するのである。

## 23.

yathā yathā hi puruṣaḥ kalyāṇe ramate manaḥ /  
tathā tathāsya siddhayanti sarvarthā nātra saṃśayaḥ //<sup>65</sup>

人は善行をして喜びを感じるようであれば、いかなる場合も物事はうまくいく。そこには疑いが無い。

sarwir niñ wwañ kaniṣṭṭhamadhyamottama tuwi / yāwat gawe hayu kajñēk ni hatinya / niyata

siddha niñ sasinādhyanā //

下流・中流・上流に関わらずいかなる人も<sup>66</sup>、善きことをしてうれしく思うようであれば、成功を望む者は必ずや成功に至る。

## 24.

dharmāḥ sadā hitaḥ puṁsāṃ dharmāś caivāśrayaḥ satām /

dharmāl lokās trayas tāta pravṛttāḥ sacarācarāḥ //<sup>67</sup>

法は人間の役に立つ。法はまた善人の拠り所である。すべての動くもの動かざるものを含め、三界は法から展開する。

mwañ kottaman ikañ dharma / prasidha sañka niñ hitāwasāna / irikañ mulahakēn ya / mwañ pinakāśraya sañ pañḍita / sañkṣepanya / dharma mantasakēn ikañ triloka //

そして法が最上であること（について言えば）、法は実に幸福の源である。それ（本務）に努める（べきである）。法はまた賢者の拠り所である。要するに、法は三界を救うものである<sup>68</sup>。

## 25.

yasya notkrāmatī matir dharmamārgānusāriṇī /

tam āhuḥ puṇyakarmāṇaṃ na śocyō mitrabāndhavaiḥ //<sup>69</sup>

法の道を追求し、思念がそこから逸脱することのない人、その人は善行の人と呼ばれ、友や縁者が嘆き悲しむようなことがない。

hana pwa wwañ tan liṅgar apagēḥ buddhinya / ar tūtakēn kadamlan iñ dharmasādhana / ya ika wwañ bhāgyamanta liñ sañ pañḍita / tan kalarākna de niñ kadañ mitranya / yadyan mānāsakāna panapana<sup>70</sup> mañatīta jīwita tuwi //

考えが揺るがずしっかりしており、本務の遂行に忠実な者は、賢者により幸せな者と呼ばれる。親類や友人を泣かせることはない。たとえ (...) 命をかえりみないとしても。

## 26.

yathekṣuhetor iha secitaṃ payaḥ tṛṇāni vallīr api samprasiñcati /

tathā naro dharmapathena sañcaran yaśāṃsi kāmāni vasūni cāśnute //<sup>71</sup>

さとうきびのために撒かれた水が雑草や蔓草をも生やすことになるように、人は、法の道を歩みつつ、すばらしい名誉や愛欲を獲得する。

kunañ paramārthanya / kadyaṅga niñ wwañ mañēnō<sup>72</sup> tbu / tan ikañ tbu juga kānugrahan de nika /

milu tka niñ ṭṛṇalatādi / sapaṅk ikañ tbu milu kānugrahan / mañkana tañ wwañ makaprawṛtti ñ  
dharma / artha / kāma / yaśa kasambi de nika //

真意はこうである。人がさとうきびに水を撒くと、その恵みをうけるのはさとうきびだけではない。雑草も蔓草も含まれる。さとうきびの近くにあるものすべてが恩恵にあずかるのである。このように、人が本務を遂行すれば、財も愛欲も名声もそれに付随してくる。

## 27.

surūpatām ātmagaṇaṃ ca vistaraṃ kulānvayaṃ dravyasamṛddhisañcayam /  
naro hi sarvaṃ labhate yathākṛtaṃ sadāśubhenātmaḥkṛtena karmaṇā //<sup>73</sup>

美貌、人徳、家柄、資財の蓄積。人は常に善き行為を自分でおこなうことにより、そのようなものをすべてを獲得するのである。

kunañ ikañ wwañ gumawaya ikañ śubhakarma / janmanyān sañke riñ swarga dlāha / lituhayu  
maguṇa / sujanma / sugiḥ / mawīrya / phala niñ śubhakarmāwasāna tinmunya //

ひとは善行を行うべきである。その結果として来世において天界に生をうけることになる。美しく、出自がよく、裕福で、勇猛。これらは善行の結果として得られる果実である<sup>74</sup>。

## 28.

kāntāraṇadurgeṣu kṛcchreṣv āpatsu sambhrame /  
udyateṣu ca śastreṣu nāsti dharmavatāṃ bhayam //<sup>75</sup>

難路の荒野や森でも、苦痛に苛まれても、災難にあっても、惑乱の中でも、武器が振り上げられていても、法を堅持する者は恐れを抱くことはない。

lawan ta waneh / riñ hēlēt<sup>76</sup> / riñ alas / riñ priṅga / riñ laya / salwir niñ duḥkhahetu / ri prañan  
kunēñ / tar tka juga ikañ bhaya / ri sañ dhārmika / apan ikañ śubhakarma rumakṣa sira //

またさらに、荒野でも、森でも、辿り難い場所でも、災難時でも、いかなる苦悩の原因があっても、戦場においてすら、法に従う者には恐怖はない。なぜならば善行がその人を守るからである<sup>77</sup>。

## 29.

manonukūlāḥ pramadā rūpavatyāḥ svalaṃkṛtāḥ /  
vāsāḥ prāsādapṛṣṭhe ca bhavanti śubhakarmaṇām //<sup>78</sup>

心和み、艶やかで、容姿端麗、美しく着飾った女性、そして宮殿高樓のテラスでの住ま

い。善行の人はこれらをものにする。

lawan ta waneh / ikañ strīratna anakbi rahayu / sēnsēnan<sup>79</sup> riñ sinaṇḍañ / bruh ri sâninakana<sup>80</sup> riñ  
jalujalu / lawan umah rahayu / makādi prāsādapṛṣṭha / upalakṣaṇa riñ bhogopaghoga / mwañ  
anarghya wastrābharaṇādi / dṛbya sañ puṇyakārī ika kabeh //

またさらに、玉女、すなわち美しき女性<sup>81</sup>で、着飾って輝かしく、男を喜ばせるあらゆる術を知る者。高樓のテラスなど壮麗な住まい、あらゆる類の享楽、高価な衣服装飾品など<sup>82</sup>。これらすべてが、善行者の財産である。

### 30.

nīpānam iva maṇḍūkāḥ saraḥ pūrṇam ivāṇḍajāḥ /  
śubhakarmāṇam āyānti saḥāyās ca dhanāni ca //<sup>83</sup>

蛙が井戸に、鳥が池に向かうように、友や財宝は善行の人に向かう。

apan ikañ balakośawāhana / tumkākēn awaknya juga ya ri sañ puṇyakarma / kadi krama niñ  
maṇḍūka / an parākna awaknya riñ sumur / mwañ ikañ manuk / an tkākna awaknya riñ talaga //  
なぜなら、人も荷も車も<sup>84</sup>、その本性から、善行をする人の所に至る。蛙がその本性から井戸にたどりつき、鳥がその本性から池に至るのと同じである。

#### 注

1. Sternbach 1979, p.12.
2. Raghu Vira 1962, pp.1-5.
3. テキスト・訳の第1-6 偈のテキスト・訳を参照.
4. Sternbach 1979, pp.13-14.
5. Sternbach 1979, p.14.
6. Raghu Vira 1962, p.11.
7. 古ジャワ・パルワ文献におけるサンスクリット引用偈と古ジャワ散文の読解比較については安藤 2002 および 2004、古ジャワ金言集の引用偈と古ジャワ解説の読解比較については安藤 2015-2017 参照.
8. Raghu Vira 1962, pp.11-12.
9. Zoetmulder 1982.
10. Sternbach 1979, pp.15-18.
11. aśṭādaśaparwa: OJED では aśṭādaśaparwa として登録。他のパルワ作品にも、この「十八巻」という表現がみられる。例えば Agastyaparwa には「バーンダワの物語十八巻をピヤーサ師が著した (394.23) とある。OJED, p.143 参照。
12. Cf. Mbh 12.337.3:

jajñe bahuññam param atyudāraṃ; yaṃ dvīpamadhye sutam ātmavantam  
parāśarād gandhavatī maharṣiṃ; tasmai namo jñānatamonudāya

- 本テキスト同様、*atyudāram* を *abhyudāra* と読む写本が南方・マラヤラム写本のいくつかに見られるが、*ātmavantam* を *ātmabhāvāt* と読むものは校訂版異読に挙がっていない。  
*gandhavatī* でなく *satyavatī* と読む写本は多くあるが、上記マラヤラム写本はそうではない。
13. OJED の引用 (*under mēna*) に従い、*n i ṅhulun* という分かち書きを修正。
14. サンスクリット偈の *ajñānatamonudāya* を的確に訳している。偈ではここが与格で *namas* (頂礼) にかかっているが、古ジャワ解説では、誕生を叙述する前のビヤーサの形容に用いている。
15. *Kṛṣṇadwīpa* は OJED に登録されていない。偈で *dvīpa-* とだけあるのに *Kṛṣṇa-* を付けたのは、サンスクリットで *Vyāsa* の別名が *Kṛṣṇa* あるいは *Dvaipāyana* (鳥生まれ) と呼ばれることを知ってその知識を示したのだろうか。
16. Cf. *Mbh* 1.56.27 (= *Mbh* 18.5.52):  
*yathā samudro bhagavān yathā ca himavān giriḥ*  
*khyātāv ubhau ratnanidhī tathā bhāratam ucyate*  
本テキストでは *bhagavān* のかわりに *atimahān* と読むが、南方・グラント写本に同じ読みがある。後半冒頭の語順は、*Mbh* 異読にも *ubhau khyātau* で始まるものがあるが、本テキストのように *ratnanidhī* が両者の間に入った形のものはない。
17. *tasakan*: “the mature product” (OJED, p.1958 “*tasak*”) に従う。
18. Cf. *Mbh* 1.2.241:  
*idaṃ sarvaiḥ kavivarair ākhyānam upajīvyate*  
*udayaprepsubhir bhṛtyair abhijāta iveśvaraḥ*  
前半で、*sarva-* と *kavivara-* が入れ替わる異読はあるが、本テキストのように *sarva-* がなく、*kavivara-* のあとに *nityam* を入れているものはない。
19. 偈では前半は *upajīvyate*、後半は *abhijāta* と言い換えているが、古ジャワ解説では *pinakopajīwana* と同じ訳語を用いている。一方、偈の *ākhyāna* を *Bhāratākathā* と具体的に表現している。*kawiwara* は古ジャワの *Rāmāyaṇa* や *Bhāratayuddha* といった作品でもサンスクリットと同義で用いられており (OJED s.v.)、サンスクリット由来の語として古ジャワ文学ですでに定着していたと考えられる。
20. *Mbh* 1.2.237 と同一。
21. Cf. *Mbh* 1.2.240:  
*anāśrityaitad ākhyānaṃ kathā bhuvī na vidyate*  
*āhāram anapāśritya śarīrasyeva dhāraṇam*  
前半は同一。後半で *anapāśritya* を *anupāśritya* と読む版が南方・テルグ、グラント、マラヤラム写本にあり、また、*dhāraṇam* を *dhāraṇā* と読む版が南方・マラヤラム写本にある。ただし、この両方とも本テキストと同じ読みをするものはない。
22. 偈の *ākhyāna* を *Byāsawacana* と言い換えて説明している。
23. *Mbh* 1.2.236 と同一。
24. 刊本の *lañēn iñ* という読みを修正 (OJED, p.1544 “*rumēsēp*” 引用参照)。
25. 偈の表現に増して、歌や笛の音でさえも聞く気がしないという脚色を施している。
26. ここまでが序文的な内容で、マハーバーラタの珠玉の価値や作者ビヤーサへの敬意を述べ、その精髓をまとめたものとしての本作の表題の意味を明かしている。
27. *Mbh* 校訂版には収録されていないが、南方・グラント版 2 写本には延伸された一話があって、そこに次の偈が含まれている。( *Mbh* 1.1.210 の後、Appendix 3・第 11 偈)

- dharme cārthe ca kāme ca mokṣe ca paramarṣabha  
yad ihāsti tad anyatra yan nehāsti na tat kva cit  
paramarṣabha / bharatarṣabha 以外は一致している。
28. 刊本テキストの *sāwataranya* を修正。
29. 偈で言及される *dharma · artha · kāma · mokṣa* を古ジャワ解説では列挙せずに *caturwarga* と総称する。本テキストでは後にもこの表現を用いている箇所がある（第141偈と第223偈の古ジャワ語解説）。
30. Cf. Mbh12.297.19:  
mānasaṃ sarvabhūteṣu vartate vai śubhāśubhe  
aśubhebhyaḥ samākṣipya śubheṣv evāvatārayet  
前半部で、*mānasa-* のかわりに *mānuṣa-* とする読みは、どの異読にもみられない。後半の *samāviṣṭa-* と *ava√kr̥* も本テキスト特有の読みである。
31. テキストどおりに主語を *mānuṣa* とすると *sarvabhūta-* との連関がとれず前半部の意味ははっきりしない。また後半部の *samāviṣṭam* という対格も落ち着かない。異読にもこのような読みがないことから、テキスト伝播過程での転訛が大いに考えられる。ここでは仮訳としてとりあえず日本語にしておくのみである。。
32. テキストの *panēntasakna* を、意味をとって正しく分かち書きする。OJED, p.459 参照。
33. 古ジャワ語解説で *ēntas* の派生形を用いており、「陸上げる、(罪や課税から)自由にする、(罪悪を)滅する」という原義からすれば、元のサンスクリットが Mbh 校訂版のように *samākṣipya* であったとするのが自然である。
34. Cf. Mbh 12.286.31:  
upabhogair api tyaktaṃ nātmānam avasādayet  
caṇḍālatve 'pi mānuṣyaṃ sarvathā tāta durlabham  
前半部 *api tyaktam* を *parityaktam* と読むのが唯一の相違点だが、デーヴァナーガリー刊本のいくつかと同じ読みがみられる。
35. テキストは *janma-mānuṣa* とハイフンを入れている。後ろに *naranya* (～ということ) とあるので、ハイフンでつないで一体の語句であることを示すのはわかるが、後分が前分を修飾するという古ジャワ語的語順なので、そのまま分かち書きにする。なお、*mānuṣajanma* というサンスクリット語的語順の同義語が *Bhāratayuddha* で用いられている (BY45.12, OJED p.1108 参照)。
36. Cf. Mbh 12.286.32:  
iyaṃ hi yoniḥ prathamā yāṃ prāpya jagatīpate  
ātmā vai śakyate trātuṃ karmabhiḥ śubhalakṣaṇaiḥ  
*ātmā vai* のかわりに *ātmānam* とする本テキストのような異読は他に見られない。
37. 古ジャワ語で *saṅsāra* (輪廻) という語を補って、善行による自力の救済を解説していることが注目される。
38. *Raghu Vira* はこの偈の典拠について言及しておらず、Mbh には同様な偈が見つからないが、*Mahāsubhāṣitasamgraha* に近似の偈が収録されている。Cf. MSS 6225:  
ihaiva narakavyādheś cikitsāṃ na karoti yaḥ /  
gatvā nirausadhasthānaṃ sa rogī kiṃ kariṣyati //  
前半部は同一、後半部に区切りや語彙の違いが若干あるものの文意は同じである。
39. Cf. Mbh 12.309.79:

sopānabhūtaṃ svargasya mānuṣyaṃ prāpya durlabham  
tathātmānaṃ samādadyād bhraṣyeta na punar yathā

前半部は完全に一致、後半部で *bhraṣyeta* を *dhvaṃseta* とする本テキストのような異読は他に見られない。ただし意味的には両者に隔たりはない。

40. 本テキストの他の箇所にも共通するが、*mānuṣyam* (人間たること) というサンスクリットに対して、*si* という接頭辞をつけて ("used to personify or substantivate concepts denoting quality, condition or action", OJED, p.1755 参照)、*si dadi wwan* (人間存在、人間という実体) と表現しているのが注目される。

41. Cf. Mbh 3.247.35:

iha yat kriyate karma tat paratropabhujyate  
karmabhūmir iyaṃ brahman phalabhūmir asau matā

本テキストは前半と後半が入れ替わっており、また *kriyate* が *kurute* となっている。このような読みは他には見られない。

42. OJED の引用 (p.1339 "pēna") では *pamuktyan* としている。

43. *wāsanā* については古ジャワ語シヴァ教綱要書 *Wṛhaspatitattwa* に言及がある。この世での行為は、阿魏を入れた瓶に残る香のように薫習・潜在力として残り、その行為の果実をあの世界において享受する、としている (第3偈古ジャワ解説)。安藤 2008, pp.24; 76 参照。

44. *swargacyuta* は *Ślokāntara* 37 に言及があり、「天界で樂を享受したのちインドラ界から墮ちた者」という一般的定義を示し、それは外見だけだと批判したうえで、くわしい説明を施している。安藤 2016, p.169 参照。一方、*narakacyuta* という表現は他の古ジャワ文献にもサンスクリット文献にも見当たらない。これらを *paribhāṣa* ("set expression, proverb", OJED s.v.) と言うに値するかは疑問が残る。

45. *Rabhu Vira* は本偈の典拠に言及していないが、*Subhāṣitaratnakaraṇḍakakathā* という仏教系サンスクリット金言集にパラレルが見られる。Cf. SRKK 2:

mānuṣyaṃ durlabhaṃ prāpya vidyutsampātacañcalam  
bhavakṣaye matiḥ kāryā bhavopakaraṇeṣu vā

前半の *lasita* / *sampāta* の以外ほとんど一致する。

46. 偈では得難くして得た人生の終わりが来ることを思念するよう述べるにとどまるが、古ジャワ解説では *dharmasādhana* ("fulfillment of duties", OJED s.v.) という表現をつかって行為の結果として天界に至ることまで述べている。*dharmasādhana* は本テキストでも他の古ジャワ作品でもよく見られる用語である。

47. Cf. Mbh 12.286.34:

yo durlabhataraṃ prāpya mānuṣyam iha vai naraḥ  
dharmāvamantā kāmātmā bhavet sa khalu vañcyate

*iha vai* にかえて *lobhatas* とする版はないが、ベンガル版の一つに *labhate* という異読があり、こちらの方が文脈に合うことから、本テキストのオリジナルが *labhate* であった可能性が高い。*sa khalu* にかえて *sakala-* ないしは類似の読みをするものはない。

48. 偈にはない *artha* にも言及している。もちろん第7偈での *dharma · artha · kāma · mokṣa* の列挙をふまえてのことだろう。

49. 本偈と同一あるいは近似の詩句は未だ見つかっていない。

50. 偈では人間としての生の獲得と輪廻からの解脱の二点を説くが、古ジャワ解説ではその間に *dharmasādhana* を掲げる。第14偈の古ジャワ解説 (注46) 参照。

51. Mbh 18.5.49 と同一。
52. artha と kāma は dharma によるという関係性の説明は偈のとおりだが、古ジャワ解説のほうで dharma という語を明示的に用いて強調しているのが見て取れる。
53. Cf. Mbh 5.122.35:  
kāmārthau lipsamānas tu dharmam evāditaś caret  
na hi dharmād apaity arthaḥ kāmo vāpi kadācana
54. 前半は Mbh 12.163.54cd と、後半は同 55cd と相応する。  
dhārmikān pūjayantīha na dhanādḥyān na kāmīnaḥ (12.263.54cd)  
dhane sukhakalā kācid dharme tu paramaṃ sukham (12.263.55cd)
- このようなセットの偈は異本にも見当たらない。
55. 偈の後半部に対する訳ないしは解説がなく「dhana にいくらかの sukha があるとしても、dharma には最高の sukha がある」というサンスクリットの主意が伝えられていない。
56. Cf. Mbh 3.32.22:  
dharma eva plavo nānyaḥ svargaṃ draupadi gacchatām  
saiva nauḥ sāgarasyeva vaṇijaḥ pāram ṛcchataḥ
- 最後の ṛcchataḥ にかえて本テキストのように icchataḥ とする異読は、北方写本に共通するが、本テキストの読みは他の箇所でも校訂版と大きく異なり、その類例は他に見当たらない。
57. 刊本の hanu では意味が取れず、転訛の類推から hēnu ("road, way", OJED, p.617 "hēnū") と修正する。
58. 注 57 と同様に、刊本の読みを修正。
59. 刊本の nēntas を正しい分かち書きに修正。OJED 中の用例 (p.205 "baṇyāga") もそのようにしている。ただし、n ēntasi ṇ tasik という解釈 (i 語尾の他動詞とする) もあり得る。
60. 同様な偈がマハーバーラタにも他のサンスクリット文献にも見つかっていない。
61. 刊本の kagawaya niṃ を修正。
62. tika という指示代名詞に読む写本もあるが、強調辞としての atika (OJED s.v.) でも意味が通る。
63. Cf. Mbh 3.198.53:  
yathādityaḥ samudyan vai tamaḥ sarvaṃ vyapohati  
evaṃ kalyāṇam ātiṣṭhan sarvapāpaiḥ pramucyate
- a-c は同一、後半 d について本テキストにほぼ同一の sarvaṃ pāpaṃ vyapohati とする写本が北方・カシュミール版のいくつかに見られる。Mbh 12.148.33 は d は上掲例よりも近いが、a と c の言い回しに相違が見られる。  
yathādityaḥ punar udyams tamaḥ sarvaṃ vyapohati  
kalyāṇam ācarann evaṃ sarvaṃ pāpaṃ vyapohati
64. 偈で kalyāṇa と言い表わしていることを dharma と受けており、dharma や dharmasādhana という語彙をよく用いる古ジャワ解説者の論調が読み取れる。
65. Cf. Mbh 12.219.7:  
yathā yathā hi puruṣaḥ kalyāṇe kurute manaḥ  
tadaivāsya prasīdanti sarvārthā nātra saṃśayaḥ
- 前半で kurute を ramate、後半で tadaiva を tathā tathā、prasīdanti を siddhayanti とする類例は他にはみられない。マハーバーラタにはもう一例 (Mbh 5.35.34) あるが、c の冒頭 tathā tathā が本テキストと一致するものの、他の相違点については前例同様、異読にも類例を見

ない。

yathā yathā hi puruṣaḥ kalyāṇe kurute manaḥ  
tathā tathāsyā sarvārthāḥ sidhyante nātra saṃśayaḥ

66. 偈では単に *puruṣa* を主語にしているが、解説のほうでは「すべての人間」と言ったうえで、さらに「下等でも中等でも上等でも」と修飾をほどこしている。これはそれほど深い意味を添えるでもない古ジャワの常套的形容と言ってよく、例えば *Wṛhaspatitattwa* では執着について論じる箇所、「あらゆるもの」といった程度の意味で「上中下それぞれの物への欲にとらわれる心」(*ikañ buddhi jēṅek hyunya riñ wastu kaniṣṭhamadhyamottama*) と述べる (安藤 2008, pp. 37; 88)。

67. Cf. *Mbh* 12.297.6:

dharmaḥ satām hitaḥ puṃsām dharmāś caivāśrayaḥ satām  
dharmāl lokās trayas tāta pravṛttāḥ sacarācarāḥ

*sat-* を *sadā* とする以外は同一。同じく *sadā* と読む写本は南方系のテルグ・グランタ・マラヤラム、およびデーヴァナーガリーのいくつかに見られる。

68. *dharma* が *tri*loka を「救う」(*mantasakēn > ēntas*) という古ジャワ解釈は、*dharma* から三界が「展開する」(*pra√vṛ*) とする偈の意味から逸脱している。その前で、*sat* (よき人) を古ジャワ語では *pañḍita* と受けているのも興味深い。

69. Cf. *Mbh* 12.309.80:

yasya notkrāmati matiḥ svargamārgānusāriṇī  
tam āhuḥ puṇyakarmāṇam aśocyaṃ mitrabāndhavaīḥ

*svargamārga* を *dharmamārga* とする読みは北方・南方諸版に見られる。*aśocya* を *na śocya* と読む例は、カシュミールの一写本にのみある。

70. *mānāsakāna panapana* について、刊本ではそのデーヴァナーガリー転写の箇所に括弧つきで疑問符が付けられており、意味がとれない読みであることを示している。基語が想定できず、偈の訳から展開した部分なので真意も読み取れず、翻訳不可として日本語訳からも省かざるを得ない。

71. 本偈と同一あるいは近似のものは、古ジャワ文献にもサンスクリット文献にも見当たらない。

72. 刊本の *mañēna* では意味がとれないので修正。*mañēnō* "to sprinkle, water" > *ēnō* (OJED s.v.)

73. Cf. *Mbh* 12.287.44:

svarūpatām ātmakṛtaṃ ca vistaraṃ kulānvayaṃ dravyasaṃpṛddhisamcayam  
naro hi sarvo labhate yathākṛtaṃ śubhāśubhenātmakṛtena karmaṇā

前半 a で、*svarūpa-* を *surūpa-* と読む写本は少なくないが、*ātmakṛta-* のかわりに *ātmagūṇa-* と読んでいる例は異本に見つかっていない。また、後半で *śubhāśubha-* の箇所を *sadāśubha-* とするのも本テキスト独自の読みである。

74. 古ジャワ解説では善行の果として、偈にはない *mawīrya* を追加して列挙している。また、これらは「*śubhakarma* の結果」と明記していることから、偈がもともと、校訂版のように *śubhāśubha-* ではなくて *śubha-* のみに言及するものだったとの推測ができる。

75. Cf. *Mbh* 5.39.53:

kāntāraṇanadurgeṣu kṛcchrāsv āpatsu saṃbhrame  
udyaṭeṣu ca śastreṣu nāstī śeṣavatām bhayam

*śeṣa-* を *dharmavat-* とする異読例はないが、デーヴァナーガリー写本の一つに *dharmabhṛt-* と

- 読むものがある。
76. 刊本の halēt を hēlēt と修正 (OJED "hēlēt", p. 613)。
77. 解説で、恐怖がない理由として śubhakarma に言及し、偈にはない説明を加えている。
78. Cf. Mbh 12.284.21:  
manonukūlāḥ pramadā rūpavatyāḥ sahasraśaḥ  
vāsaḥ prāsādapṛṣṭhe ca tat sarvaṃ tapasaḥ phalam  
a は同一、b で sahasraśas にかえて svalaṃkṛta- と読むのはカシュミール写本やデーヴァナーガリー写本のいくつかにみられる。後半は c は同一だが、d は大いに異なる表現をしており本テキスト独特である。「苦行の結果」という原典の叙述はマハーバーラタから切り出した場合には文脈には全く沿わないため、本テキストの文脈にのせるべく「善行」と書き換えた、という推測も不可能ではない。
79. 刊本は saṃsaṇan としているが、このままでは意味がとれないので, sēn ("shining", OJED s.v.) の派生形として解しておく (ただし OJED に置語 +an の形での登録はない)。
80. OJED 引用句 (p.680 "inak") を参考に、sa- は "all that ~" を意味すると解して、刊本の読み saṇinakana を修正。
81. 偈で pramadā および rūpavati と表現している女性について、別のサンスクリット由来語、strīratna ("宝石のごとき美しい女性") でいったん訳し、さらに現地由来の語彙 anakēbi rahayu ("美しい女性") と言い換えているのが興味深い。
82. 古ジャワ解説では善行者の財産として偈にはないものも列挙している。なお、bhoga と upabhoga の定義は Wṛhaspatitattwa 28 に述べられており、そこでは、bhoga は食、upabhoga は衣類装飾に関わる享楽とする (安藤 2008, pp. 36; 87)。熟語では享楽全般を指すと解されている (OJED s.v.)。
83. マハーバーラタ中には近似の偈が見つからないが、Indische Sprüche に収録される金言 (IS 3727) の前半部のみが一致する。それは Hitopadeśa 1.185 に相当する (Johnson 1847, p.36)。  
nīpānam iva maṇḍūkāḥ saraḥ pūrṇam ivāṇḍajāḥ  
sodyogaṃ naram āyānti vivaśāḥ sarvasampadaḥ
84. 偈で saḥāya と dhana を取り上げるのに対し、古ジャワ解説では balakośawāhana という表現である。しかもこの語の意味合いは古ジャワ文献ではどちらかといえば軍兵を指すもの ("troops and their supplies", OJED, p. 889) で、直訳というよりも、サンスクリット語から派生したセットフレーズで置き換えたというところだろう。

<参考文献>

- Bötlingk, O.  
1966 *Indische Sprüche*, 3 vols., Osnabrück (reprint).
- Gonda, J.  
1998 *Sanskrit in Indonesia*, Delhi (reprint).
- Hahn, M.  
1982 *Die Subhāṣitaratnakaraṇḍakathā*, Ein spätbuddhistischer Text zur Verdienstlehre, *Nachrichten der Akademie der Wissenschaften in Göttingen, I. philologisch-historische Klasse*, Nr. 9, pp. 313-374.

Johnson, F.

1847 *Hitopadeśa, the Sanskrit Text, with a Grammatical Analysis, Alphabetically Arranged*, London (digitized).

Juynboll, H. H.

1901 *Eene Oudjavaansche Vertaling van Indische Spreuken, Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde van Nederlandsch-Indie*, VIII deel, pp. 393-398.

Raghu Vira

1962 *Sārasamuccaya: a classical Indonesian compendium of high ideals*, New Delhi.

Sternbach, L.

1963 Sanskrit subhāṣita saṃgraha-s in Old-Javanese and Tibetan, *Annals of the Bhandarkar Oriental Research Institute*, Poona, vol. 43, pp.115-158.

1974-2007 *Mahā-subhāṣita-saṃgraha: being an extensive collection of wise sayings in Sanskrit*, vols. 1-8, Hoshiapur.

1979 *On the influence of Sanskrit Gnostic Literature on the Gnostic Literature of Old Java and Bali*, Torino.

Sukthankar, V.S., Belvalkar S.K. et al (eds.)

1933-1966 *The Mahābhārata, for the first time critically edited*, Poona.

Zoetmulder, P. J.

1982 *Old Javanese-English Dictionary*, 2 vols., 's-Gravenhage.

安藤 充

2002 Sanskrit Tradition in Old Javanese Parwa Literature: with special reference to the *Mosalaparwa* and the *Prasthānikaparwa*, in: *Buddhist and Indian Studies in Honour of Prof. Sodo Mori*, 国際佛教徒協会, pp. 511-524.

2004 Some Features of the Old Javanese *Bhagavadgītā*, in: *Gedenkschrift J. W. de Jong*, 国際仏教学研究所, pp. 1-14.

2008 古ジャワ世界におけるシヴァ教の受容と展開 (平成16年度～平成19年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C)) 研究成果報告書) 全119頁.

2015 「古ジャワ金言集 *Ślokāntara* 訳注研究 (1)」『人間文化』(愛知学院大学人間文化研究所紀要) 第30号、pp. 191-212.

2016 「古ジャワ金言集 *Ślokāntara* 訳注研究 (2)」『人間文化』(愛知学院大学人間文化研究所紀要) 第31号、pp. 159-179.

2017 「古ジャワ金言集 *Ślokāntara* 訳注研究 (3)」『人間文化』(愛知学院大学人間文化研究所紀要) 第32号、pp. 165-189.

